

↑現時点で最高速記録を保持するトリアルZ。この記録を破るのは誰か？

話を元に戻そう。12月21日、茨城県谷田町にある日本自動車研究所、ヤタベ、ヤタベと呼ばれている自動車雑誌のテストなどで、読者にもなじみの深いところ。その日本自動車研究所の高速周回路が舞台であった。当日の天候は曇り、12月にしてはかなり低湿度、風もなく、ターボ車にとっては、うってつけの絶好のコンディションであった。

ナンバー付のマキシマムスピードは、1982年の10月に、RSヤマモトのチューンになるL型3リッターツインターボがマークした298・010km/h。それ以後、足踏み状態で、この記録をオーバすること、RE雨宮の雨宮勇美や、トラストの大川光一、RSヤマモトの山本豊史の本命チューナーの目標であり、当日は、大阪のトリアル牧原道夫のチューナーの顔も見られ、300km/hオーバーに対する自信のほどがうかがえた。

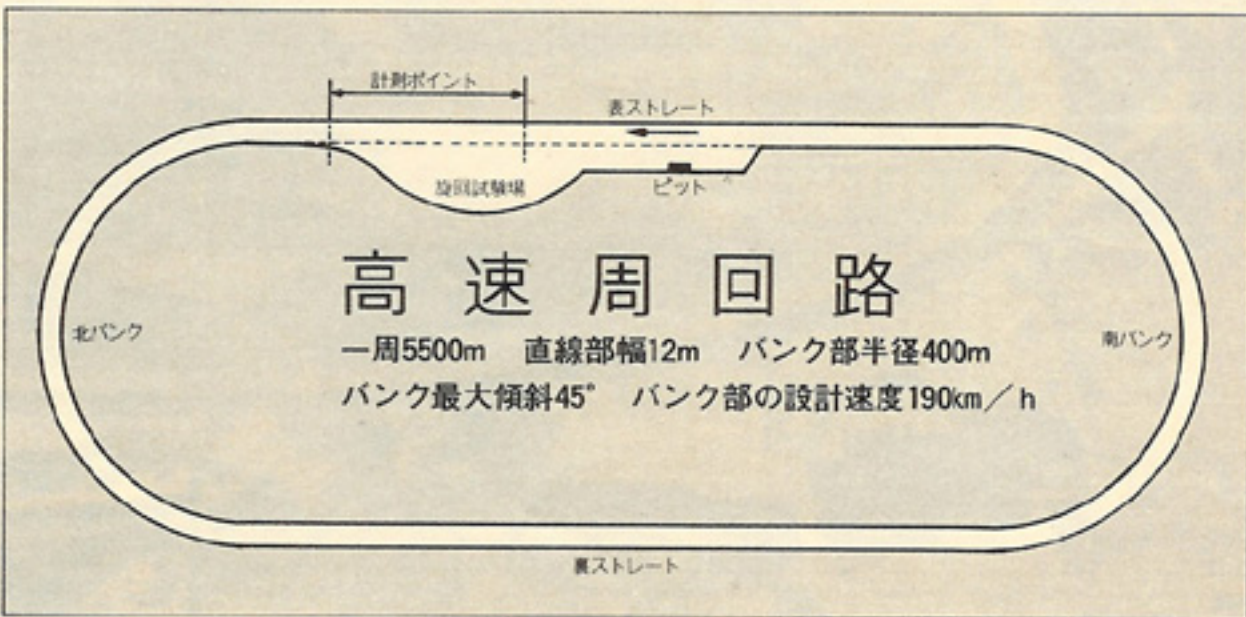
ドライバーの井上晴男くんが、先頭にRSヤマモトのS130フェアレディZに乗り、2周目に299・750km/hをマーク。次いでトラストのセリカXツインターボが出ていくが、タービンにトラブルが発生してピットイン。3番手は、トリアルS130フェアレディZツインターボがピットアウトしていく。非常に感じのいいエキゾーストノートをかなでていた。計測の結果、1周目でいきなり297km/hをマークしてしまっただけで、待望の2周目、計測の結果は、307・955km/hと出た。この瞬間、コースにいた誰もが喜んだ。夢とまでいわれた300km/hの壁を、それも大幅にオーバーするスピードである。



↑一番野郎・牧原道夫氏

本命といわれた、RSヤマモト、RE雨宮、トラスト大川光一3名チューナーの顔には、してやられた！という表情が一瞬ではあったがよぎった。

まさに劇的な一瞬であった。当日このコースにいて、この快挙を間にあたりに見た何十人かの人達は、きつと忘れることの出来ないものだ。振り返ってみれば、チューニングカーによるマキシマムスピードのトリアルが始まったのは、今から12年も前の1973年。始めたのは、自動車雑誌の老舗であるモーターマガジン誌。動機は、1973年といえ、オートマキシマムの読者は知らないと思うが、「オイルショック」という、自動車にとっては悪夢みたいなもので、当時は、この「オイルショック」のため、各自動車メーカー

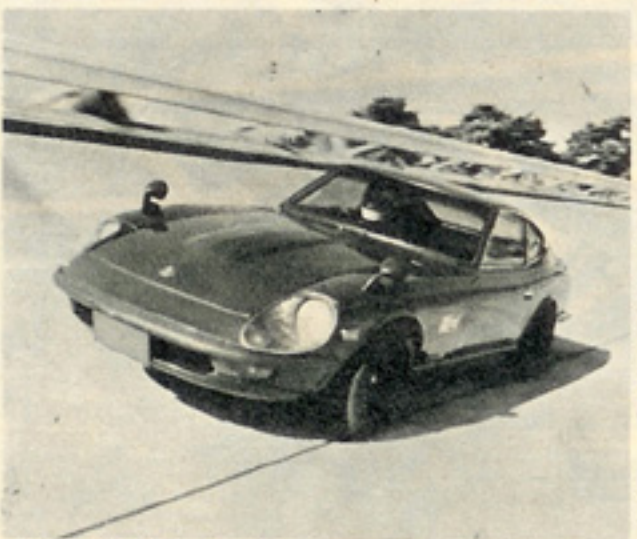


も、燃費対策に追われ、新車の開発なり、発売する余裕がなかったため、自動車雑誌としては、ニューモデルが少ないため特集が組みにくく、苦肉の策の企画ものとしてやったのが始まりとは、まさに皮肉ともいえるよう。

最高速の舞台となったのは、谷田部のコースがあったおかげだ。

この谷田部は、自動車メーカーや部品などの関連メーカーが出資して昭和44年に完成された。

広大な敷地の中には、風洞や衝突施設をはじめ、各種の路面など、クルマに関するありとあらゆる施設があり、コースは、その一部にすぎな



↑最高速トリアル及びL型ブームの火つけ役・久保Z

い。しかし、このコース、周回路といわれ、ホームストレートとバックストレートの2本のストレートを2つのバンクでつないだオーバルなコース、1周は5・5kmの長さを持つ。ストレートは1・1km、バンクは最大傾斜45度で、190km/hの速度であれば、ステアリングを切らずに走ることが出来る。文字通りの高速周回路である。

この谷田部の高速周回路がなかったら、チューニングカーの最高速トリアルも存在しなかったわけで、それほど谷田部の存在価値は大きいのだ。

チューニングカーの最高速でエボックメイキングなのが、1976年2月にマークされた240・80km/h。これは、L型チューンにかけて定評のあるスピード・シヨップ久保の手になるフェアレディZ S30、240Z-Gをベースに、久保オリジナルのオーバースイスの3リッター用のピストンを組み入れられたZがたたき出したものだ。

この記録を出したことで、スピードシヨップ久保のマークした240・80km/hのスピードをオーバーしたのは、それから2年後の1978年、ターボでおなじみのHKSがチューニングしたカローラレビン、1600ccの2T-Gは、2リッターにスケールアップされ、さらには、ヘッドやバルブなどのメカニカルチューンがされたうえ、HKS得意のターボチャージャーをドッキング。また、室内は軽量化が施され、クラッチなども、当時では高価なボック&ベックなどを用い、結果は、243・240km/hのマキシマムスピードをたたき出した。

この時トリアルしたドライバーによれば、パワフルではあったが、えらく直進性が悪く、恐怖感があったといっていたが、この頃のチューニングカーの考え方が出ているようなコメントといえよう。

1976年、1978年の、スピードシヨップ久保やHKSのチューンドZやレビンが記録をたたき出したが、